

イスラエルへの積年の誤解を 公正、冷徹な目で分析する

二十世紀最大の事件のひとつはイスラエルの建国だろう。流浪の民だったユダヤの民が父祖の地に還りつき、その後の国際政局を左右する台風の眼となったからだ。

苛烈な情勢のなかで生き残りに賭けるイスラエルに国際世論はしばしば鋭い批判の眼を向ける。だがこうしたイスラエル批判は、ホロコーストの悲劇に見舞われた民の苦しみに背を向けることなのだろうか——。こんな問いかけにひとつひとつ丁寧に答えたのが、『ケース・フォー・イスラエル——中東紛争の誤解と真実』である。

著者のアラン・ダーショウィッツは、ハーバード大学のロー・スクール^①の教授であり、法廷に立つ人権派の弁護士でもある。まず各章の冒頭にイスラエルを指弾する「告発」を据え、「告発人」が挙げる事実と論拠を紹介する。これを受けてダーショウィッツは、「真実」は何であるかを明らかにし、その論述を裏付ける証拠を次々に提示していく。そうした彼の姿勢はあくまでも冷静で客観的だ。

イスラエルは植民地主義国家も



しくは帝国主義国家か——。ユダヤ人はホロコーストを逆用したのではないか——。イスラエルはパレスチナ人の国家建設を拒否したのか——。こうした告発を組上に乗せて、著者は丁寧に論述を繰り返していき、立証に使われている論拠は一級の法律家らしく中立的なものに限っている。

現在のイスラエル政府を批判する人は反ユダヤ主義者の烙印を押されてしまうという告発にダーショウィッツは、「単なるイスラエル批判を反ユダヤと決めつけた例を知らない」とその論拠を示す。その手堅い手法はニューヨーク・タイムズの書評で高い評価を得た。「過去を記憶できない者は、罰として過去を繰り返す」。著者はこんな箴言を引いて、パレスチナ紛争を解決するには歴史の事実そのものに立ち返る必要があると説く。

今月の2冊

選者

手嶋龍一

(外交ジャーナリスト、作家)

↑『ケース・フォー・イスラエル』 アラン・ダーショウィッツ著 滝川義人訳 ミルトス (03・3288・2200) 2940円

世界のトヨタですら陥った 「機能不全」から得る教訓

トヨタ自動車がかつて生産台数全米第一位となった直後にトヨタ首脳がワシントンを訪れた。三大自動車メーカーを抜いてトヨタナンバーに躍り出ること何とも気が進まない——首脳の表情はそんな本音を覗かせていた。「自動車の国アメリカ」で首座に座することは、アメリカの政治にも、地域社会にも、どつぷりと浸ることを意味するのだが、当時もいまもトヨタはその自信を持ってにらんでいるだろう。そんななかで、今回のリコール事件は起きたのだ。この出来事は一巨大企業の守備範囲を超えて、「ものづくり大国ニッポン」に言い知れぬ衝撃を与えた。「不具合連鎖」「プリウス」リコールからの警鐘」は、「品質のトヨタ」

の神話をほしのままにした自動車会社に何が起きたのかを扱った緊急報告である。

サンディエゴの高速道路を走っていたレクサスから緊急通報された一本の電話。それが全ての始まりだった。「踏み込んだアクセルがもとに戻らない」と叫んだまま、時速190キロで柵に激突し、家族4人が犠牲となった。トヨタ側はこの惨劇をことさら無視したわけではない。だが「レクサス」から「プリウス」へと不具合の連鎖は果てしなく広がり、最強の自動車王国を苦境に追い込んでいった。トヨタには、インテリジェンス・サイクルが回っていないかった。現場のディーラーやエンジニアを経由して最高首脳にあがってくる情報の回路に機能不全が生じていた。それは決して日本のメーカーに特有の病弊ではない。どのメーカーにも起こりうる。だが、現場で起きた事実を直視せず、「アメリカ政治の陰謀説」に逃げ込んでしまえば悲劇は繰り返すだろう。本書で示された数々の教訓はそう語りかけている。

●てしま・りゅういち NHKワシントン支局長を経て独立。著書に『スギハラ・ダラー』(新潮社)など。

↓『不具合連鎖 「プリウス」リコールからの警鐘』トヨタリコール問題取材班編集 日経BP社 (0120・255・255) 2940円

